

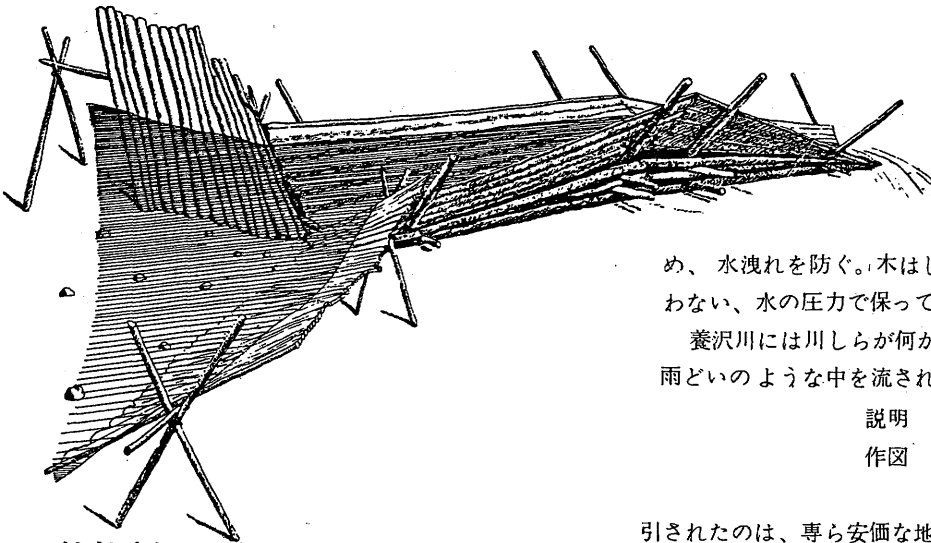
昭和60年9月15日

# 郷土あれこれ

郷土館だより  
第12号

五日市町立  
発行 五日市町郷土館 東京都西多摩郡五日市町五日市920-1 電話 0425-96-4069 有線4607

## 養沢川の木出し



### はじめに

郷土あれこれの2号「秋川の筏物語」、8号「山持はどうして生まれたか」で、秋川の主要産業である林業の今昔物語をお贈りしたが、今回は五日市町養沢にお住いの久保島保之さん<sup>やすゆき</sup>を尋ね、養沢川の木出し(材木の搬出)のお話をうかがった。

久保島さんは明治41年2月生まれ。今年77才になる。話は久保島さんが10代の頃、大正末年から、昭和初年にかけてのことで、川を利用した材木輸送はこの頃が最後である。

秋川谷の林業は、元来江戸(東京)という大消費地へ安い輸送費で搬出できるところにメリットがあった。<sup>いかだ</sup>筏という便利な輸送手段を使って、4日程の日程で六郷(多摩川河口)まで運ぶ。しかも筏は上荷を運ぶことができる。昔は筏に乗せた杉皮の売上げで、筏乗りの人夫賃くらい稼出したといわれた。江戸の材木市場で木曾や紀州から集まる天下の銘木に伍して、多摩川材が盛んに取

### 川しらの図

川しらは、木流しのために設けた人工水路。丸太と丸太の間にスゲをつ

め、水洩れを防ぐ。木はしばらず、カスガイなども使わない、水の圧力で保っている。

養沢川には川しらが何か所も作られ、材木は、この雨どいのような中を流された。

説明 久保島保之氏

作図 小林裕児氏

引されたのは、専ら安価な地廻り材としてであり、柱、<sup>な</sup>貫板、小丸太等の小材が、その主力であった。

太田区郷土の会会長で筏研究家の平野順治氏によると、かつて(江戸後期-明治期)江戸には「四つ谷丸太」という銘柄で呼ばれた杉材が出廻っておったという。この産地は高井戸、杉並など江戸の西郊で、四つ谷に問屋があり、輸送は専ら陸送によった。四つ谷丸太は消費地に近い有利さを発揮し、また中には京都北山杉の向うをはるような床柱用の良材も産し、江戸の建築用杉材を抑えていたが、産地の開発にともない、産出量が減少衰微したという。わが多摩川材は「青梅丸太」という名称で呼ばれ、この四つ谷丸太の後継ぎとして市場に登場した。青梅丸太は初めは四つ谷丸太の名で取引されたともいう。

いずれにせよ、秋川谷の林業(植林による育成林業)がはじまるのは江戸の後期で(郷土あれこれ8号参照)木出しや筏輸送の方法も、先進地の技法を習い覚えたものである。もっとも、重い檜の大材を深い山から搬出する木曾谷の木出しをヘビー級とすれば、秋川谷のそれは

フライ級といえる。しかしフライ級はフライ級なりに、山にあわせ、川にあわせ、出材する木材にあわせキメ細く工夫されていた。秋川谷の木出しは水量の乏しい溪流流しに特徴があるようだ。

山中で伐採された木は、人の肩、木ぞり、しら(後述)など幾通りかの方法で、一番手近な木流し可能な川まで運ばれる。それは秋川の上流か、その枝川で通常水量不十分な谷川である。この谷川を木材は一本ずつバラのまま流され(管流しと<sup>くだ</sup>いった)、本流秋川の土場<sup>とば</sup>まで運ばれる。土場というのは筏を組む作業場で、一定の広さをもつ川原が必要である。秋川の土場は20余りあったが、その上限は養沢川と秋川の合流点落合橋、下限は秋川谷の筏が揃って出発する山田堰であった。

久保島さんの話に出る養沢川は水源を大岳、御岳に発し、秋川最大の支流である。流域は植林向きの山地で、古くから林業の盛んな地帯である。養沢はいわお沢から出た名称(『武蔵野歴史地理』高橋源一郎著)といわれる位、大きな岩がごろごろしている谷川である。現在は水量が乏しく、とても木を流せたとは思えないが、久保島さんによると、昔は二本の丸太に乗って、川上から、川下までスイスイいったもんだという。もっとも、そのためにはさまざまな仕掛けを川にほどこしたそうである。広大な養沢川流域の山地に江戸時代より植林が進んだのは、この川が木出しに使えたからに他ならない。もし木が流せなければ、養沢地区の山々はせいぜい薪炭用の雑木山で終わったろう。

今回久保島さんのお話を聞くに当って、五日市町中野にお住まいの画家小林裕児氏をお連れした。養沢川の木出しの仕掛けを図解していただくためである。

久保島さんのお宅は養沢地区の宝沢<sup>ほうざわ</sup>にあって、標高は城山山頂と同じ430メートル、夏も涼しい。喜寿をすぎた久保島さんは今も元気一ぱいで、宝沢の沢水を使ってヤマメの養殖をなさっている。常に創意工夫に富んだ生き方をされる人だ。

## 1 山のしら出し

— 久保島さんは、いくつ位から働き出したのですか。

K 高等小学校を出るとすぐだね。

— どんなお仕事でした。

K 伐採と出材、出しです。昔のことでしら出しといって、水をぶって氷<sup>しゅつがい</sup>らして、その上を木材をすべらして出す……そのほかいろいろやったね。

— 木出しは大勢で組んでやるんでしょ。



K そうだ。この宝沢にも組があった。

— 伐採はノコギリを使う?

K マサカリも使うね。

— しら出しというのはどういう仕掛けをするんですか。

K 丸木を使って真ん中を低く縁を高くならべてつなげ、(U字型の)木の道をつくる。その中を材木をす

べらせる。

— 木のすべり台ですね。長さはどの位。

K 地形によって違うが、長いのは何百メートルもある。

— 山の上の方から出て、最後のところはどなるんですか。

K 川で流せるところへ落す。

— 伐採する時期は。

K 春先から秋だ。昔は杉皮がよく売れたから、伐るとすぐ皮をはいだ。木も乾いて軽くなり、水によく浮くしな。

— しら出しは水をうって氷らせるそうですから、時期は冬ですね。

K そうだ。しらの真ん中の木二本をボウズといい、その両側の木をボウズワキといって素性のよい真すぐな木を選んでおく、そこへ水をうつ。縁のハタギへ水がかかるとすべて危い。

— ハタギのところは人が乗るんですか。

K そうよ。親方が朝暗いうちに「おい小僧、水ぶってこい」というから、五升樽<sup>ごしょうず</sup>につるをつけた桶を持って沢水を汲んできて、ハタギに登って丸い木のひしゃくで水をぶつ、ボウズとボウズワキだけに水をうつのは馴れないとむずかしい。

— しら出しというのは木が勢いよく下ってくるので、危険な仕事ですね。

K だから、下から合図をして、よいとなったら上の者が材木を入れてやる。入れさえずりゃ氷っているから、ドーとすごい勢いで落ちる。

— 何で合図するんです。

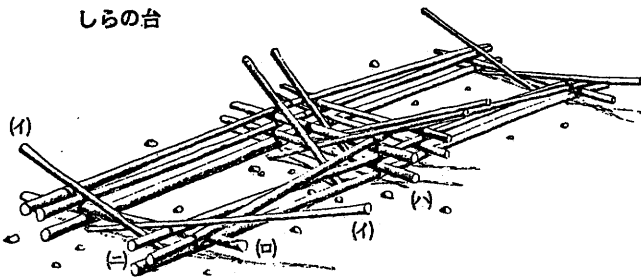
K こう(口の中へ指を入れて)笛を吹く。この笛の吹ける者がよびつぎといって3人位出たね。「おめえはいいなあよびつぎだよ」とうらやましがられた。よびつぎは火にあたって番をしていれればいいんだから。

注 しらの語源は修羅であるが、一般にしらといいしゅらとはいわない。しら出しは急傾斜を利用した木出しで緩傾斜か平面の場合はそり出し（木の棧をうった木馬道をつくり、その上を材木を載せた木櫓を曳く）が使われた。養沢は谷が狭く、急斜面が多いのでしら出しが多用された。もっともしらは急すぎると木が傷むので山を巻くように斜めに設けたらしい。平野順治氏によると本場の木曾などでは一里も二里もある長いしらかが作られ、途中木の速度を緩めるのれんという仕掛けも設けられたという。

## 2 川のしら

- 今の養沢川をみると、木流しなんて考えられませんね。昔の方が水量が多かったんでしょうね。
- K 今の十倍はあったかね。大岳山のあの広いあたりが全部雑山だったもんな。
- 雑木山の方が水もちがいいようですね。
- K 植林がすすみすぎたね。
- 川のしらはどういう働きをするのですか。
- K 水をわきに逃がさないように、岩なんかで流れが分れているところへこしらえる。一か所に水を集め水かさを上げる仕掛けだ。山しらよりハタギを多く使う。
- 雨どいのような仕掛けで、水位を高める。
- K そうだ。水のかえしが、ずっとおき（川上）の方までいって、みと（注 水途＝筏の水路）ができる。
- 養沢川に何か所ぐらい作ったのですか。
- K 6か所でも、7か所でも、木が流れるまでいくつでも作った。

しらの台



イ) ヤゾウ ロ) ハナ枕 ハ) シリ枕 ニ) ヤゾウ枕  
図の左手前が川上。土台の高さは地形によってさまざま

## 3 管流し

- 養沢川の管流しは何人位でやったのですか。
- K 大勢のときは20人もいたかね。木材が川つぶちのな

ぎ（山の斜面）につまると、今日からやるべえということになる。先頭に立つのを木ばなといって4人位いた。水途をつけながら（注 邪魔な石など両わきにどけ、水路をつくりながら）流してゆく。真ん中になかのべというのがいて途中につかえている木をはずして流す。一番うしろに木じりというのがいて、木の通った川みちをぶっこわしながら（注 復旧しながら）木を残さないように流してゆく。川のしらも最後にこわして流す。

— せっかく作ったのに。でも木は大事な売り物ですからね。

K 別な組が流すときは、また作り直すのよ。

— 木ばなや木じりは熟練者でしょう。

K そうだ。なかのべはいろいろいたがな。

— どこまで流したのですか。

K 落合であげたこともあるし、中村（秋川橋周辺）までいったこともある。

— 土場では、どのように木あげをするのですか。

K 土場でもしら（注 水際に木をならべ、その上を木を滑らせる仕掛）を作ってみんなで両側に分れて、トビ（蔦口）を打って、木やりで送る（注 木上げ歌を歌いながら木を引揚げる）木の落ちる所にいる者は、すごい勢いで飛んでくるやつを上手にさばく。

### 木上げ歌

へこれもお山の吉兆で	ヨーイヨイ
元締さまを祝いましょう	ヨーイヨイ
明けの方から入舟で	ヨーイヨイ
丸に田の字の帆を上げて 注1	ヨーイヨイ
七福神が乗り込んで	ヨーイヨイ
お家目がけて乗り込んだ	ヨーイヨイ
アールワイナ ヤルワイナ	
ヤレトイウナラ ヤルワイナ	
へこれもお山の吉兆で	ヨーイヨイ
元締さまを祝おうか	ヨーイヨイ
庄屋さまを祝おうか	ヨーイヨイ
元締さまを祝いましょう	ヨーイヨイ
元締さまの中庭に	ヨーイヨイ
三蓋松を植えこんで	ヨーイヨイ
一の枝には札がなる	ヨーイヨイ
二番の枝には金がなる	ヨーイヨイ
三の枝には小判小粒が鈴になったぞ	ヨーイヨイ
そのまた松の根元には	ヨーイヨイ

鶴と亀とが舞い遊ぶ	ヨーイヨイ
ヨーイヨイノ ヨイヤラセ	
ハサー若い衆 確りたのむぞ	ヨーイ
鍵を調べて	ヨーイ
奥の置場へ	ヨーイ
ずいらずいらと	ヨーイ
しゃくり飛ばせろ	ヨーイ
長いものだよ 注2	ヨーイ
確りたのむぞ	ヨーイ

注 1' 元締の商号屋号に合わせて歌う。

2 長いもの、太いもの等、引上げる材木の形態に合わせて歌う

(星竹 網野蔵之助氏より聴取る)

— 給料はどのくらいもらえたのですかね。

K 木流しの勘定(賃金)は、揚げた木の本数を数えて相場をきめたね。(久保島さんはその頃1年間奉公して70円貰ったという。)

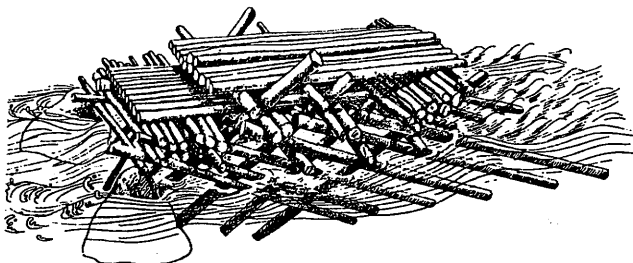
— 養沢川の木流しが終わったのは、いつ頃でしたか。

K さあ はっきり覚えていないが、だんだん馬力(ばりき)(四輪の荷台を曳いた馬)が出てきたね。自動車は私が小学校5年生の時(大正7年)はじめて見た。学校中の生徒から、女の先生まで後を追っかけていったもんだ。

注 文書によると、明治末年に馬力を使って青梅鉄道の福生駅や拝島駅まで送り、そこから貨車に積込む陸送がはじまって、筏輸送と併用された。明治末年に大洪水が頻発した関係もあって陸送が次第に優勢になり、ついで大震災前後からトラック輸送がはじまり、大正14年の五日市鉄道開通とあいまって完全な陸送時代に入った。

## おわりに

久保島さんは養沢川が増水したとき、流木止めのあ



あばの図

ばという仕掛けも説明してくれた。これは天然の地形を利用し、岩に横木をわたり、それを枕に斜に木(ヤソウ)を刺し、さらに反対方向からサカヤを刺し、つぎつぎに流れてくる木を留め組みあげてゆく。水は木と木の間をくぐり抜けて流れ、木だけが留められ、積みあげられてゆく。水勢が強いとサカヤがきいて「あば」はガッチリと締まり決して崩れない。これは岩の多い養沢川では作りやすい。平野順治氏によると、岩のない川では木でウシを組み、それを支えにあばを作ったという。また、木管川では管流しされてきた材木を抑留する場所を「あば」といって留網を張った。従って綱場と書いてあばと読むという。

ところで、秋川の源流地帯である檜原村では養沢川と違った木流し方法が見受けられた。五日市町戸倉の萩原波平さんのお話によると、檜原村南郷の矢沢では、てっぼうという方法を用いたという。これは木材を組んで川水を堰止め、水かさをふやしておき、イッキに堰をこわして溜り水に乗せて木を流す方法である。古来鉄砲流しとか鉄砲出しとか呼ばれる方法で、各地で行なわれた運材方法であるが、堰がイッキにこわれなければ、水勢不足で木は残ってしまうから、堰作りに独自の工夫がほどこされていたようである。

檜原村本宿の近くに岩の飛び出た難所があり、管流しの材木がよくひっかかった。あとから流れてくる材木が次ぎ次ぎにつきささり、水の圧力で押せども突けどもどうしようもなくなくなってしまう。こんなとき木流しの熟練者なら要の木を見つければ、三本の材木を抜きとる。すると今までビクともしなかった木の塊りが、するするとほぐれて流れ出す。「まったく不思議な技だった」とは自分でも木流しを経験した萩原波平さんの話である。

現在は林道が四通八達し、ケーブルによる搬出、トラックによる陸送が縦横に行なわれているので、木流しの技術も全く過去のものとなった。久保島さんや萩原さんも少年期から青年前期の頃の見聞と体験で、必ずしもその全貌をご存じではないようだが、いまこれらの方々の記憶を記録にとどめておかなければ、すべては消え失せてしまう。

それは、働く人々の体から体へ受けつがれ、練りあげられ、技術というより「芸」に近いものであったのだが—。